

## 高駢「山亭夏日」小考

——「一架薔薇滿院香」と「滿架薔薇一院香」について考えたこと——

甲斐勝二

## 始めに

以前、同窓の研究者との雑談の中で、話題が古典の「校勘」の問題に及んだことがある。その時、通常はテキストの原状復元を目指すこの作業も、時には原作者が目指した内容の體系性の完成に向け、後世の讀者が書き直す場合もあり得るのではないかという話になったのを覚えていゝる。例えば、ある句の中で文字にA・Bの異同があつたとしてしよう。その場合、校勘者はどちらかを「是」とし、或いは「勝る」として決めていく事になる。たとえ底本に依る場合も、底本を是とする態度が潜在的にあるはずだ。純然たる字形の類似や音聲の類似といった客観度の高い選擇理由がないなら、時には「この文の論者のめざした思想からすれば、ここはAの文字の方が通る」とみて「Aが勝る」と決める事も起こるだろう。あるいは當たり前のようにAの字句が選ばれ、そもそもBの方は相手にされないかも知れない。その結果、時には作者と校者の理解の隔たりにより、原初とは違う文字に變わる可能性もあり得る。だとすると古くからの作品の中には、原作者の提出した原初的な思想がその荒削りさの故、後世の校者によってさらなる完成をめざして書き直されてきたものもあるのではないか、という方向に話が進んだまでは記憶するが、それからは先は、はて、どのような議論になつたのか、また結論らしい

ものが出たのかどうか、ちつとも思い出せない。すでに十五年も前の話である。

このような議論は校勘の専門家からすれば、たわいのない話に違いない。どちらかに決められなければ二つを並記しておけば良いだけの話だ。また、書き直されたにせよ、その部分が原文を變えるほど多いことも想定できないから、かかる議論はあくまでも極端なものであることは私にも分かる。とはいえ、近頃たまたま先のような校勘をめぐる議論を思い出す問題にであい、再び考えてみたくなつた。それは講義で晩唐の高駢の詩「山亭夏日」を取り上げた時に胸に浮かんできた次のような問題だ。つまり、古典作品の字句の異同の決定に於いては、個人の力量や思想もさることながら、その校勘者の屬す集團が持つ美的な感性もまた字句の異同の決定に影響するのではないかというものだった。

言うまでもなく、このような問題の證明には膨大な資料が必要である。拙論はこの問題をめぐって考えてみた覚え書きにすぎないことをあらかじめ断つておきたい。

## (一)

ご存じのように「山亭夏日」の詩は、樓臺もあればそれを映す池もある高駢の別荘を舞臺にしたもの。季節は夏、前半の「靜」を描くことで

後半の「動」を見事に表現した詩である。これまで「夏」の詩としてしばしば選集に採用されてきた。漢文の教材に取り上げている高校の教科書もある。改めて示す必要もないかも知れないが、論述の便宜上以下に詩原文及びその邦文譯を何種類か挙げ、この詩の解釋例についての情況を確認させていただきたい。なお出典がどこかにでも明記されていれば( )の中に示す。

原文と解釋例(傍点は筆者による。以下同じ)

A 『四季の唐詩』蔡子民監修 加賀美文一著 1989年 東方書店 P64

本文：綠樹陰濃夏日長 樓臺倒影入池塘 水精簾動微風起 滿架薔薇一院香

薇一院香

解釋：夏の日盛り、山の亭にいと、綠の樹々は地上に濃い影を落とし、高殿の影は、池の中に、さかしまに寫っている。

日は長く、靜まり返った山中で、水晶の簾のような池の水面が、かすかに動いたかを見ると、そよ風が起こり、風に乗って、花壇の薔薇の香りが、庭いっぱいに廣がって来る。(『全唐詩』)

B 『漢詩日歷』目加田誠編 時事通信社 1988年 p182

本文：綠樹陰濃夏日長 樓臺倒影入池塘 水晶簾動微風起 滿架薔薇一院香

薇一院香

解釋：綠の樹々の陰は濃く、夏の日は長い。樓臺は池の水面に影を逆さまに落としている。水晶の簾が動いて微風が起こり、棚一杯の薔薇の香りが庭中にただよっている。(『萬首唐人絕句』)

C 『歷代中國詩精講』星川清孝 1954年 學燈社 p550

本文：綠樹陰濃夏日長 樓臺倒影入池塘 水晶簾動微風起 一架薔薇滿院香

薇滿院香

解釋：綠の樹々は深く濃い陰をつくり、空には強烈に照る夏の日が

長く、高どの作りの建物の影が倒に池の堤の内側に寫っている。水晶の簾がゆらいで涼しい微風が起こると、一つだけの棚にさいいてる僅かの薔薇の花が、部屋中一杯に匂って来る。(出典未詳)

D 『新譯詩抄』土岐善麻呂 1970年 春秋社 p289

本文：綠樹陰濃夏日長 樓臺倒影入池塘 水晶簾動微風起 一架薔薇滿院香

薇滿院香

解釋：青葉かげ 夏の日の長さ 池水に かげさすうてな

そよかせに みすのゆらぎて 香ぞあふるる ひと枝花ばら

(出典未詳)

E 『からうたもよう』上田治穂 1989年 大修館書店 p74

本文：綠樹陰濃夏日長 樓臺倒影入池塘 水晶簾動微風起 一架薔薇滿院香

薇滿院香

解釋：綠濃き木陰 あぶる陽に 樓臺倒せり 池の面 水晶の簾の搖れに 風見えて にわかに薫る 薔薇のひともと

(出典未詳)

以上の五つの例を使い「山亭夏日」詩について以下の問題を指摘したい。まず、解釋においては、「水精(晶)簾」を、水面の風の搖れの喩えとるか、或いは本當の簾と取るか、という違いがあること。Aの譯詞は實際の簾ではなく水面の搖れの比喩と解釋している。次に、薔薇の花の數を一枝に咲く程度あるいはわずかな數と考えるか、棚一杯の薔薇と考えてかなりの數とするかという違い、これは本文を「一架薔薇滿院香」で理解するか「滿架薔薇一院香」で理解するかという字句の異同と關係がある。薔薇の花の數を少數に絞るのはC・D・E共に「一架薔薇滿院香」の側に立つ。Aには明示がないものの、Bは明らかに「棚一杯」と理解し、本文は「滿架薔薇一院香」としているからだ。

始めに挙げた「水精簾」の解釋の問題は、『唐詩解釋辭典』に既に説明がある<sup>②</sup>のでそちらを見て頂く事にしよう。ここでは、後者の解釋の差異の問題とおよびその解釋と密接な関係がうかがわれる「一架薔薇滿院香」と「滿架薔薇一院香」との字句の異同について考えたい。というのは、「山亭夏日」の譯詞や解釋はあちこちで見えるのだが、この「滿」と「一」の字句の異同と解釋については、その異同の指摘はあつても、何らかの根據を以て意見を述べているものとなると、管見の及ぶ限りほとんどないからである。その理由は、先掲の『唐詩解釋辭典』の校語に示されるように、「滿架」と「一架」とを同義として解釋するべきだからに違いない。つまり、この異同は具體的な差異を持つ解釋上の問題とはならないので、わざわざどちらが勝ると決める必要はない、よつて解説の對象とするには及ばないというわけだ<sup>④</sup>。しかしながら、高駢が「山亭夏日」の詩を初めて作つたときには、いつたいどちらの句を作つたのだろうかと言う事、それは考えてもよい問題だ。なぜならば、「滿」と「一」とは、たとえ意味が同じで同様に仄聲とはいへ、その字畫や聲韻は異なり、異體字とか通假字といった關係ではなく、語法や意味も全く同様というわけではない。朗詠の時の響きも違うだろう。もし、「およそ詩人の工夫は、自分の感じたものをいかに適切な言葉で表現するかと言う點にあり、陳腐な言い古された言葉より、自分自身のイメージを適切に表現しうる言葉を探ることに全神経が注がれる<sup>⑤</sup>。」とするならば、作者の高駢は「一」と「滿」の使用順に熟考を重ねたに違いない。既に「推敲」の故事を経ている晩唐の時代、これは決して奇異な推測ではないはずだ。また、そこから導かれた解釋も、上記のように多くの薔薇・少ない薔薇という二つの方向に分かれる可能性を持つ。これを單なる「解釋の幅」と言えばそれまでだが、その理由も考える價值はあろう。

この字句の異同について主張を持って校した譯者は、管見の及ぶ限り

先掲の例Eに引いた上田氏だけだった。上田氏は原文最終句を「一架薔薇滿院香」と作るのが正しいとし、その注で以下のように述べる。

第四句は「滿架の薔薇、一院香し」となっている本もある。結果は同じだが、詩情は全くことなる。例えて言えば、「軒先の風鈴が百も一ぺんに鳴るので、涼しさを感じる」というようなもので、いただけない。「一架の薔薇滿院香し」だからこそ、詩なのだと思う(同書p74)。

つまり「滿架」では詩情を缺くとして「一架」を採用し、後に「滿院」が来るのが適切だと讀むのである。もし「結果が同じ」であるなら「軒先の風鈴が百も一ぺんに鳴る」という情景は出てこないのではないかと疑うが、上田氏は香りの傳わりに注目し、「一」の文字がここに置かれることで、たとえ薔薇の花が柵一杯にひろがついていてもその中の「一」枝の薔薇から廣がると言う視點で解釋するのがこの最終句を支える「涼しさ」の詩情だと言いたいのだろう。さればこそ「ひともと」という譯語が用いられたに違いない。だとすると、たとえこの「一」は「一面」とか「一杯」を示す「滿」と同義語の「一」であつたとしても、ここには「多」に對する「一」として少なさを示す「一」の意味もまた掛けられていると見ることになる。同様の解釋はCやDの譯にも見えるので、上田氏の「詩情」に基づく主張は決して無理なものではない。

しかしながら、先に例を挙げたように「滿架薔薇一院香」を本文として選び「柵一杯の薔薇の香り」と譯した選者もいる。その場合、どのような「詩情」を思い描いていたのだろうか。それは指摘されるように、「軒先の風鈴が百も一ぺんに鳴る」という詩情を素晴らしいとするものなのであろうか。

## (二)

ところで、管見の及ぶところ、先の例からわかるように「一架薔薇滿院香」と作るテキストは日本での引用に限られ出典が明記されないのが普通である。一方中國ではこの句は通常「滿架薔薇一院香」となっているが『全唐詩』を出典とする。日本でも出典を明記して引用するのは「滿架薔薇一院香」と作る。これは無理からぬ事で、日本では、林羅山の書寫本を起こして發行したという宋代編纂の『唐詩絕句』掲載のものが「一架薔薇滿院香」に作っており、こちらをテキストとして採用する可能性もあるのだが、この『唐詩絕句』の方は中國ではほとんど傳わっていない。一方、中國側に立てば、高駢の原初の詩集は既に散逸しており「山亭夏日」のテキストを伝える版本で、手頃に確認できるものは宋代の『萬首唐人絶句』および清の『全唐詩』に掲載されたものである。ところが、これらは共に「滿架薔薇一院香」に作り、異同の指摘はない。よって、現在その據り所を中國の書籍に求め、それを明記して引用しようとするれば、「滿架薔薇一院香」の句で引用せざるを得ない。近年中國で採用される詩句が皆「滿架薔薇一院香」となってしまうのも仕方のないことである。もつとも、明代の類書『山堂肆考』にはこの詩句を引用して「一架薔薇滿院香」と作るから、明代では「一架薔薇滿院香」と作るテキストもまた中國で行われていたことが分かる。日本に傳わった『唐詩絶句』掲載の句も決して據り所がないわけではなかった。

「山亭夏日」の高駢の自筆本が残存しない以上、この二つの句のいずれが元來の姿か、それを客觀的に決めねばならぬとすれば、如何にしてそれが可能であろうか。

先ず、『全唐詩』に集められた高駢の詩を對象として、その用法の可能性

性を探ってみよう。

「一」を使う例としては、「一曲狂歌」、「一醉忘情」、「一條千里」等の例はあっても、「滿」と同様の意味で「一」を使っている例はなく、疑えるものとしては、「爲愛君山景最靈、角冠秋禮一壇星」<sup>①</sup>を挙げられるくらいである。

一方「滿」を使う例としては、

酒滿金船花滿枝、佳人立唱慘愁眉（贈歌者二首）

惆悵仙翁何處去、滿庭紅杏碧桃開（訪隱者不遇）

花滿西園月滿池、笙歌搖曳畫舟移（寫懷）

畫舸搖煙水滿塘、柳絲輕軟小桃香（平流園席上）

滿眼由來是舊人、那堪更奏梁州曲（宴犒蕃軍有感）

席箕風起雁聲秋、隴水邊沙滿目愁（邊城聽角）

滿宮多少承恩者、似有容華妾也無（句）

滿身珠翠將何用、唯與豪家拂象牀（句）

等が見られ随分「滿」の文字が現れる。「山亭夏日」の詩において作者が「滿」の字の配置に工夫したことは想像に難くない。しかしながら、この用例だけでは、原初の形態が「一架・滿院」なのか「滿架・一院」なのかは決められない。

次に考えられるのが、唐詩の用例の多寡による推定である。「一架」と「滿架」或いは「一院」と「滿院」、これらの唐詩の中で用例を見てもよい。

唐詩の中に「一架」と薔薇を併せて表現する例として、

「薔薇一架紫、石竹數重青」（徐昌「蔡起居山亭」）

「一架・長條萬朶春、嫩紅深綠小巢勻」(裴説「薔薇」)

春日戲題十首

の二例を擧げることができる。徐昌は初唐の人、裴説は晩唐の人である。一方「滿架」では、以下のように蔓植物が棚一杯に廣がっているという表現が擧げられる。

「滿架・高樽紫絡索、一枝斜鞞金琅璫」(唐彥謙「詠葡萄」)  
 「薔薇花盡薰風起、綠葉空隨滿架・藤」(徐夔「開窓」)

しかし、「滿架」が直接薔薇につく例は見つからない。だとすると、唐詩での薔薇の語の使用法に基づく場合、「一架」と使う方が妥當なように見える。しかし、徐夔の例は花を落として緑の葉を茂らせた薔薇の蔓状の枝が廣がつている表現であるので、まったく薔薇に用いられないと言うわけでもなさそうだ。「滿」の語を好む高駢が「滿架」と使わなかつたとは言いが切れない。よつて、「一架」に薔薇との結合の可能性の高さは見いだせるが、これだけでは決定性は缺くものと思われる。

次に「山亭夏日」の句では「一架」に併せて使われる「滿院香」の用例を見てみよう。これも『全唐詩』に以下の用例が擧げられる。

「茱萸秋節佳期阻、金菊寒花萬院香」(薛濤「九日遇雨二首」)  
 「風撼芳菲萬院香、四簾慵卷日初長」(孫光憲「浣溪沙」)

一方「一院香」も同様に以下の用例が擧げられる。

「岑寂雙甘樹、婆娑一院香」(杜甫「樹間」)  
 「風歇風輕一院香、紅芳綠草接東牆」(權德輿「雜言和常州李員外副使

これは、唐詩では花の香りの廣がりにとちらの字句も使いうる可能性を示すものだ。

では、唐詩以外の用例はいかがであろうか。まず「一架」か「滿架」かの点について注目する。「滿架」となると、唐詩同様に藤や葡萄などの棚ものの植物に使われる例が多く、薔薇の場合には「一架」との結びつきのほうが多い。例えば、宋の鄭剛中の「薔薇」では、「一架薔薇四面垂 花工不苦費臙脂」とあり、元の袁桷の「宮女賞花圖」では、「一架薔薇錦障稠 滿庭蜂蝶替人愁」とあり、ほかに幾首か擧げられるが、「滿架薔薇」の例となると明の謝晉に「起來捲幔久支頤、滿架薔薇已開萼」(「凝香閣選入湖海耆英集」)および、唐世瀚の詩餘に「滿架薔薇花欲謝」(「南唐浣溪紗」)の二例が擧げられる程度であり見つからない。だとすると、「山亭夏日」の當該詩句も「滿架薔薇一院香」ではなく、「一架薔薇滿院香」だった可能性が高くなるが、しかし、「滿架薔薇」もないわけではない。

さて、以上見た用例の情況からすると、可能性としては「一架薔薇滿院香」と作るテキストの方が高そうだが、この「一」は「滿」とも解釋し得るものだから、原初が「滿架薔薇一院香」と作っていた可能性も棄てきれない。むしろその用例の少なさを高駢の表現上の工夫なのだと言主張する根據にもなるだろう。ただし、ここで「一架」と言うものも、それは「棚一杯の」という意味で用いられていたことは注意しておきたい。

(三)

さて、ここで考えてみたいのが、明代に二種のテキストを確認できる

にも関わらず、清代に『全唐詩』が編まれたおり、「山亭夏日」のこの部分に異同の指摘がないのはなぜかという問題だ。『四庫全書總目提要』によれば、この『全唐詩』は諸本を併せて校注を施したものだという。確かに『全唐詩』所收の高駢の他の詩には「一作」として異同が示されている部分かなりあるので、諸本との對校が行われていることが分かるのだが、この句には何の異同の指摘もない。

その理由として筆者に妥當と思われるものを三つあげる。

第一の理由は、「山亭夏日」の詩句は「滿架薔薇一院香」のみが正しいとされ、「一架薔薇滿院香」はそもそも相手にされなかったというもの。この場合「一架薔薇滿院香」と作る詩句の流布が當時極めて少なく異同を示すほどではなかった可能性もある。

第二の理由は、「一」も「滿」も同じ意味なのだから、句自體の意味に變化をもたらす異同として指摘するには及ばないというもの。しかし、その場合ここで、「一架薔薇滿院香」ではなく「滿架薔薇一院香」を採用したのは、後者の句作りが勝る、という意識があつたという推定が成り立つ。

以上の二つの理由は共に、『全唐詩』の校訂者にとって「山亭夏日」詩は「滿架薔薇一院香」と作る方が「一架薔薇滿院香」と作るよりも詩としての完成度は高い、と見ていたことを示唆する。

第三の理由は、『全唐詩』の編者の前には「一架薔薇滿院香」と作るテキストが全くなく、「滿架薔薇一院香」の句には何の疑念もいだかれなかったというものである。だとすると、明代の初めの頃には二種流通していたテキストも、清朝になり『全唐詩』編集當時(康熙年間)までには「滿架薔薇一院香」の方が一般化し、もう一方の「一架薔薇滿院香」を載せるテキストはほとんど流通していなかった事になる。

では、どうして片方のみが流通していたのだろう。もちろん各種の運

不運もあつたに違いない。しかし、明から清にかけての詩集の編者たちが「滿架薔薇一院香」の方に表現としての完成度を認めたことを一因と考えることも可能ではないか。もし「一架薔薇滿院香」の方が優れるという意識が強くあれば、そちらを採るテキストの方が増えてゆき、『全唐詩』の編者も無視はできなかったはずだからだ。

以上筆者に想定しうる三つの理由はどれであっても、『全唐詩』編纂當時には「滿架薔薇一院香」のほうが「一架薔薇滿院香」よりも優れるという意識があつたことを示唆するものである。もし、以上の推定に妥當性があるなら、中國では「滿架薔薇一院香」の方が詩の表現として優れたものだと言う意識があり、それ故にこの句の方が生き残つたことになりはしないか。

一方、日本には「一架薔薇滿院香」に作る「山亭夏日」の詩も伝えられていた。比較に於いてこちらの方を好む撰者も一定數いて、現在こちらが採用される情況もかなり起きています。その理由として先掲の『軒先の風鈴が百も一ぺんに鳴るので、涼しさを感じる』というようなもので、ただけない。『一架の薔薇滿院香し』だからこそ、詩なのだと思う」という指摘があるのだが、果たして「滿架薔薇一院香」が示す詩情は「軒先の風鈴が百も一ぺんに鳴る」ことから與えられる「涼しさ」の表現に重點があつたのだろうか。かかる判断は日本ならではの理解からくるものではないか。「滿架薔薇一院香」となるとまた別の理解に基づく詩情を考えることができるのではあるまいか。

#### (四)

なぜ先に「日本ならではの理解」と言ったのか。それは筆者が、この詩とその字句の異同をめぐって、本務校で實施した記述式のアンケート

の経験による。その時學生には、「一」も「滿」もここでは同じ意味、よって詩句自體の表現している情況は同じだと説明し、「とはいえ情況は同じでも、文字が違えば讀者が受け取るイメージはやはり違ってくるだろう、皆さんならどちらの字句がよいと思うか、理由をつけて答えよ」と尋ねた。主な受講生は現代中國語を主に學ぶわが東アジア地域言語學科中國コースの二年生、時間は二〇分程度、その理由は百字程度で記させた。

その結果、受講生四十一名の内「滿架薔薇一院香」を選んだのが十名、もう一方の「一架薔薇滿院香」は三十一名だった。壓倒的に「一架薔薇」が好まれている。初めにテキストとして見せたのが「一架」に作る土岐善麻呂の譯詞だったせいかも知れない。しかし、「一架薔薇滿院香」を選んだ理由としては、「一」が先で「滿」を後ろに持つてくるほうが前から後ろへ擴がつていくとかふくらんでいくイメージが持てる氣がする（K君）や「最初に「一」という少ないイメージを持つてきて、後ろに「滿」という多い大きいイメージを持つてくることにより薔薇の香りが廣がつていくように感じられるから」（I君）といった意見がみられた。これは、先掲の譯詩集で日本の撰者が「一架薔薇滿院香」を採用した理由に沿うものであることを考えると、この句のほうが我が學生諸君の美感に沿うものではないのか、これは彼らが無意識にもつ日本的な理解に基づくものではないかと推測してみた。つまり、日本の感覺では、「一架」といったとき、この「一」は、漢語使用者が通常持ちうる數量詞と組み合わせた時に持つ「全部」とか「一杯」といったイメージ、例えば「一臉汗」と「滿臉汗」が同じだと言う感覺が浮かぶよりも、多いものに對する「一つ」として、後に出てくる「滿」が持つ量の多さに對する少なさのイメージの方を強く浮かべてしまうのではないかと考えたわけである。「一」と「滿」を「少」と「多」との比較で捉えるなら、

わずかな花から風に傳えられて廣がり中庭に滿ちて行くという情景に美しきを感じるという理解が導かれるのも頷けることだ。この立場からすると、「滿架」として初めから「柵一杯に咲く薔薇」を意識するような句作りは、「ただけない」となるのも確かに起こりうるのである。

一方「滿架薔薇一院香」を善しとした意見として、「最初に「滿」を使った方が薔薇が滿開だということをすぐに思い浮かべることができるし、後ろに「一」を使えば一つの場所中にその香が廣がつているというのがわかりやすいと思う」（N君）、「一院香」で或る一つの庭、「滿架薔薇」でたくさんバラと譯したら、バラの香がその庭中に滿ちているという情景が浮かびやすいから」（F君）として、豊かな数のバラの花の姿と香の高さへの注目が伺われた。この場合、バラの花から香りが傳わつていくという時間的な感覺ではなく、風がすぎた後一面に廣がる香とそれを送り出したたくさん薔薇という情景的な感覺を重視するものといえよう。風の「涼しさ」の強調に注目するのではなく、この情景の重視という方向でも詩情は成立するように思う。

管見の及ぶところ、中國でもこの詩の最後の句に關して異同の決定に結びつく詳しい解釋は見つからない。解釋自體も『唐詩鑑賞辭典』<sup>⑧</sup>の唐永德氏の以下のような解釋がかなり念の入ったものと言いうるのみである。唐氏は水晶の簾を水面の揺れと解釋して後、次のように述べる。

正當詩人陶醉于這夏日美景的時候，忽然飄來一陣花香，香氣沁人心脾，詩人精神爲之一振。詩的最后一句「滿架薔薇一院香」，又爲那幽靜的景致，增添了鮮艷的色彩，充滿了醉人的芬芳，使全詩洋溢着夏日特有的生氣。「一院香」又與上句「微風起」暗合。詩寫夏日風光，純乎用近似繪畫的手法……綠樹陰濃，樓臺倒影，池塘水波，滿架薔薇，構成了一幅色彩鮮艷、情調清和的圖畫。

かかる解釋は薔薇の香りと鮮やかな花の色に注目したもので、深紅の薔薇の花が緑の木々にくっきりと浮かび上がって鮮やかな光景を示し、風とその風に乗って広がる薔薇の薫りを視覚的嗅覺的氣持ちよさと共に描いたものということになる。筆者は唐氏の解釋に基づきながら、さらに次のような解釋も可能かと思う。まず夏の日差しに萬物が押さえこまれて動きを失った情景の中、高駢が波立つ水面の揺れに氣付いてそれを水晶の簾の揺れと形容し、そしてそよ風が吹きすぎたその後に残された薔薇の香りを意識する、その香りの源を探して中庭を見渡したとき、これまで夏の日差しのなかで意識されなかつた柵一杯に咲き誇る薔薇の花に氣づかされてはつとしたところを表現した、というものだ。この解釋では、夏の日差しにくっきりと浮かんで咲く柵に満ちる薔薇の花の様子が強調されてくるが、水面を過ぎる風の動きやそよ風の到達、伝えられる薔薇の香りに包まれる感覺など、わずかな時間に詩人におとづれた出來事を巧みに切り取り表現した詩として十分成立するように思われる。だとすると、やはり「滿架」と初めに使った方が「滿」の語に導かれて「柵に満ちるが如く咲き誇る薔薇」のイメージが生きてくるのではないか。これを先に擧げられた風鈴の喩えに敢えて倣えば次のようにいえるかもしれない。つまり、ぼんやりしていた夏の日、風鈴の音が一瞬響きその音にはつとして振り返ると、そこには色とりどりに仕上げられた様々な風鈴を滿杯に並べ掛けた風鈴屋の柵があり、その彩りの鮮やかさにはつとさせられたというものだ。これなら詩情として成立するのではあるまいか。

もちろんこの解釋が正しいと言ひ張るつもりはない。しかし、このような解釋が成立するならば、「滿架薔薇一院香」の詩句もまた、それなりの美感に支えられる可能性はあるわけだし、「一架薔薇滿院香」で「一架」

が「滿架」と同じ意味だといひながら、わざわざ「一架」の薔薇の花をわずかなものと考えて理解する必要もなくなつて、表現に對する解釋自體素直なものになるだろう。「一架薔薇滿院香」と「滿架薔薇一院香」との二つの可能性がありながら後者が好まれたとすれば、こういつた「柵一面にさく薔薇の花」の豪華さへの美感が選ばれたからではあるまいか。もし、「滿架薔薇一院香」がそもそもその形であれば、高駢の作詩の意圖もそこにあつたことになろう。

### 最後に

ここで、はじめに觸れた問題に戻りたい。有り體に言えば、これまでの「山亭夏日」の詩句をめぐるであれこれ述べたのは、字句の異同の決定の折、客觀的な理由を持ち得ない場合、個人の校者の裁量に見えてもその作品が受容された地域の美感というものがその異同の決定に反映する可能性があるのでないかと問いたがためだった。これまで述べたことからすれば、「山亭夏日」の最終句に「滿・一」のいずれを採用するかという場合、中國では、柵に一杯咲き誇る薔薇のイメージ、高い香りを重視する方の表現が好まれるが故に「滿架薔薇一院香」を採用する選擇があり、日本ではわずかな薔薇のそこはかとなく發する香りの滿ち廣がりやを重視する表現を好むがゆえに「一架薔薇滿院香」が採用されたと考えられそうだが、もしそれが可能なら、その地域的な美的志向の差が字句の異同の決定に影響を與え得るものと推測することができるかも知れない。だとすれば、本來は同一の詩でも受容地域によつては原初の詩句に異同が起り、それぞれの土地で異同を起ししながら傳えられていくという現象も起りうる。もちろん、必ずしもその作家を生んだ本家の土地が原詩に近いものを残すわけではなく、時には、本家の方の美感



が變わつてゆき本來の字句が變わつてしまい、一方その詩を伝えられた遠方の地域には原詩の姿がそのまま残るといふ場合も起こりえよう。

これに關連して、冒頭に記した校勘をめぐる議論に關わる次の問題が生まれてくる。それは、異同に見られる別の字句が作者の原初の表記ではないと疑われる場合でも、そちらを採つた方が校者としてその詩の完成度が高くなると思われた場合、優れると見る字句を採用しその本來の詩想に一層近づくように磨きをかけようとするべきか、それともやはり作者の原初の表記に校勘して戻してしまふべきか、という問題だ。これは、「詩文」というものを、個人の作品であつても公開された以上、語り繼がれて磨き上げられて行く書き換え可能な開かれた「物語」や「歌謠」的作品として見る立場に立つか、或いはその表現を何者にも變えがたいものとして選んだ「作者」との密接さを重視する立場に立つかという問題に關わつてくる。もちろん、「文字の正誤を考察確定する」<sup>⑥</sup>のが校勘の作業である以上、校勘の態度は後者でしかあり得ない。加えて作者の個性と著作権を強く認める現代の考え方に隨うなら、後者を採るべきである。さもなければ一定の個人を對象にした「作家論」は成り立たない。しかしながら、藝術作品はその人物が作るものではなく、初めからそこにある眞理や美的存在をその人物が形にして表現したものにすぎないという發言もしばしば聞くところだ。これが眞實であるなら前者の視点もまた棄てがたい。前者の視点では、作品と作者とが切り離され、極端な場合その時代やそれが傳わる場所によりふさわしい書き換えも可能として、作品は時代・場所・階層といった受容される側の影響を受けながら繼承變化する物語や歌謠的な性格を持たされる。そこでは人格を持った個人を特定せねば書き得ない「作家論」は成り立たない。そこに成り立つのは、「受容論」或いは「作品論」というものである。

本篇で取り上げた問題、つまり個人の詩文の異同に出會い、その選擇

に決定的理由が見つからず、理解として解釈に優れた方が採用される場合、それが意識的ではなく選定者の暮らす地域の美的志向性や受容傾向に導かれる事もあり、それが先述の如く「山亭夏日」の字句の異同に示されたような場合は、個人の作品である詩文として伝えられるものの中に、實際のところ、上に述べた二つの視点の間でゆれながら伝えられてきたものもあつたことになりはしないか。

以上、氣になつていた問題をこの機會に整理してみた。結果は言わずもがなのことかもしれないし、ご批判もあるだろう。「山亭夏日」の解釋の問題も含めて御教示をお願いします。

## 注

- ① 加藤周一監修『國語総合』教育出版社2006 p289。その出典は『全唐詩』で「滿架薔薇一院香」に作る。
- ② 松浦友久編『唐詩解釋辭典』大修館書店 1987 pp179-182
- ③ 同上書「高駢・山亭夏日・校語」参照。
- ④ 例えば、内田泉之助『新選唐詩鑑賞』（明治書院1956 p152）では「一架薔薇滿院香」の句をひき（出典の明示はない）、内田泉之助監修『中國の名詞鑑賞 晚唐』（明治書院）では「滿架薔薇一院香」となつていて何の異同の指摘もない。これは、前野直彬編『唐詩鑑賞辭典』（東京堂出版1970）に引く「山亭夏日」の詩の語釋に「最後の句が滿架の薔薇一院香」と「一」と「滿」とが逆になつてゐる本もあるが、結局同じ意味になる」と言うことなのだろう。ただし、その解釋は「棚いっぱい薔薇で庭中に香りが満ちた」となつてゐる。
- ⑤ 佐藤保『漢詩のイメージ』大修館書店1992 p2 前書き
- ⑥ 筆者が参照しえた中國刊行のものでは『中國古詩名篇鑑賞辭典』（江蘇古籍出版1987）のみが「一架薔薇滿院香」に作る。然しこの書籍は1979年に日本で出版された漢詩の鑑賞辭典の翻譯らしい。この句には校注はない。
- ⑦ 長澤規矩也『唐詩絕句解題』『和刻本漢詩集成總集篇』第二輯所收

汲古書院 1978

⑧ 例えば李長路『全唐絕句選釋』（北京出版社1987）では、「水精」が「水晶」と作るテキストの存在を指摘しても、「一架薔薇」と作るテキストの存在は指摘していない。「一架薔薇」と作るテキストの流通は少ないのではないか。

⑨ 但し『四庫全書總目提要』によると、この『山堂肆考』は「所收雖多掇拾群籍，不盡採本書。而網羅繁富，存之亦足備參考焉」というもので、参考にはできて信用はおけないようだ。

⑩ テキストは中華書局『全唐詩』を利用。

⑪ 「和王昭符進士贈洞庭趙先生」の詩。この「一壇星」は、壇上に廣がる一面の星と解釋しうるかと考えたが、よくわからない。

⑫ 引用に見られる「酒滿金船花滿枝」および「花滿西園月滿池」の句の「滿」を一句内に二度使う用法の存在は、『唐宋時賢千家詩選』（『和刻本漢詩集成總集篇』第9輯所收・汲古書院1979）に掲載する「山亭夏日」が作る「滿架薔薇滿院香」の一句内に「滿」字を重ねる句作りに似ており、或いはこちらが原形かという疑いも起こる。しかし、それはここで扱っている問題とはずれていて、またこのテキストはあまり信用できそうもないので、指摘に留める（長澤規矩也「解題」参照）。

⑬ 面白いのは、明初の楊孟載の『眉菴集』に載せる「山亭夏日」を意識したらしい二首の作品である。「首夏書事・夏初臨」の詞、句中にある「猶記當時水晶簾 一架茶蘼有誰知」の中に詠まれる「茶蘼」は薔薇同様の

棚ものの花らしく、「水晶簾」に次いで「一架茶蘼」と出れば、「山亭夏日」を思い出すのは自然だろう。だとすればそのとき楊孟載が覺えていた「山亭夏日」の詩は「一架薔薇滿院香」の可能性が出てくる。しかしながら、同じく『眉菴集』に載せる薔薇について唱った次の絶句の詩句では、「何處南風開滿架，綠陰庭院水晶簾」（『雜畫其八』）と唱う。句中「開滿架」とか「水晶簾」と使っているのが、これもまた「山亭夏日」を詩をふまえたものと推測されるのだが、この場合は前者とは異なり、「滿架」を使っているから、その記憶にあった「山亭夏日」の句は「滿架薔薇一院香」だった可能性が高い。先に見たように明代では二つのテキストの存在が確認されているので、楊孟載が作詩當時に意識したテキストがそれぞれ異なる可能性はある。しかし、楊孟載は「山亭夏日」の詩の最終句を「滿」でも「一」でも同じ意味で理解していたであろうことは十分推測できることだ。さればこそ基づくテキストに頓着する必要はなかったのだろう。

⑭ 『四庫全書總目提要』では『全唐詩』を評して「至於字句之異同、篇章之互見、根據諸本、一一校註、尤爲周密」と指摘する。

⑮ 『唐詩鑑賞辭典』第2版 上海辭書出版社 2004 p1285

⑯ 「ある古籍書の異なる版本を集めて、それらの文字や語句の異同を比較し、その正誤を考察決定する」（倪其心『校勘學大綱』北京大學出版社 1987 p1）

（福岡大學人文學部教授）